

私の故郷は道志川下流の『三太の里』

私が生まれ育った相模湖町道志地区の近くを相模川の支流、道志川が流れています。道志川は国道413号線に架かっている新道志橋のすぐ下流で相模川と合流し、津久井湖にそそぎます。

ですから、道志地区は道志川のいちばん下流にあるというわけです。対岸は津久井町三ヶ木地区です。道志川は横浜水道の水源として知られ、また鮎釣りの名所として多くの人に親しまれている清流ですが、道志川と聞いて、「ああ、三太の里だな」と思われる年輩の方も少なくないと思います。まさしく、道志川下流の地域は1950年4月からNHKラジオで放送された連続ドラマ「三太物語」の舞台なのです。



作者の青木茂は道志川に架かる道志橋近くの「溪流の宿」でこの作品を書きました。宿の主人は「三太物語」に登場する「仙爺」のモデルになった濱太郎という人物で、末娘のカツ子は後に神保敏夫と結婚し、父の死後、夫婦で宿を継ぎました。「三太旅館」と名付けたが、その後旅館は、新道志橋完成に伴い、上流の弁天橋近くに建設されました。東京オリンピックが開かれた1964年(昭和39年)に新道志橋が完成しましたが、三太が活躍した舞台は、新道志橋が

建設される以前に川に架かっていた旧道志橋の三ヶ木側のたもと、三太旅館の元屋敷が有った場所です。またその周辺には水車小屋も有り、その為道志川の清流をより一層引き立てていました。その周辺の景観の素晴らしさは、釣り人の心を掴んで離しませんでした。いくつかの釣り宿が沼本ダム周辺に有り、どの宿もシーズン中はもとより年間を通して遠方からくる釣り人の予約で満員、昼も夜も賑やかでした。昼間は清流で鳥や蛙の鳴き声を聞きながらの釣り。夜はまた大物を釣り上げた話で盛り上がり、夜明けまで笑い声が絶えなかったとか。

道志川の水量は豊富で川幅も広く、水も透きとおるほどのまさに清流で、時折川の珍客カワウソが現れました。たぶん餌を見つける為の漁に出てきたのでしょう。その珍客の可愛らしさにひかれ、ある釣り人がカワウソを刺激しないように気をつけながら後をつけることにしました。するとカワウソは上流に向かって泳ぎはじめ、釣り場案内をしてくれるかのように、振り返りながら「魚のいる場所はこっちだよ」とでも話しかけるかのように上流へと進みはじめ、その先を見ると少し急流になり、瀬音も高くなり大物鮎がいそうな絶好の場所に辿り着きました。釣り人が絶好の釣り場に気を取られているうちに、カワウソは役割が済んだのか、いつしか姿が見えなくなると地元道志川を知り尽くした人が話してくださいました。

私が住む相模湖町道志から日用品などの買物に津久井町の中野(川和)まで行くのは大変でした。険しい山道を下り道志川を渡り現在のPCコンクリート工業(株)工場手前入口の「旧県道」相模原与瀬線に出ました。バスも通っていましたが、木炭バスの頃は坂道を上るのが大変で、乗客が後押しすることもありました。道志の住民で木炭バスに乗る方は少なく、背中に買物を入れる為のショイカゴ(竹製の籠)を背負い歩いて行きました。急な坂道を下りようやく道志川に着く道は、地域住民が生活物資の買入れにどうしても津久井町の中野(川和)まで行かなければならない道、生活道路だったのです。その為、昔から先人達が考案された手作りのごくシンプルな木製の板橋が有り、橋の架け替えの時は、長老の意見を参考に工事は進められ、完成させました。台風の多い年は橋が壊され、その都度住民総出の作業となりましたが、時折台風や大雨の濁流により形跡もなく流され、荒川方面まで牛車を準備して橋を探しに行くことも多く、後にはそれを教訓に台風が来て流されても川岸に残るようなことが出来ないものか住民で話し合った結果、太い針金で橋全体を連結し流れて行かないように川の近くの高台に杭を打ち込み、針金でつないでおくことに気付きました。その後、台風が来て大水が出て橋が少しは壊されていても使っていた資材は予想通り、杭につないでおいた針金の効果により、川岸に流れ着いていました。

「三太」が初めて登場したのは終戦後間もない1946年8月。児童雑誌『赤とんぼ』の誌上です。作者の青木茂は、釣りを楽しむためにこの地を訪れ、物語の着想を得たそうです。東京から中央線とバスでわず

か3時間の場所に、シカやイノシシ、タヌキ、キツネなどが人里近くに姿を見せる情景は当時としても珍しかったのだと思われます。

そして、4年後にNHKの電波に乗ると一躍全国に知られるようになりました。一世を風びするほどの人気といっても過言ではありません。「おらあ、三太だ」で始まるこのラジオドラマを実際に聞いて楽しみ、今でも記憶されている方も多いのではないのでしょうか。また、映画化され、連続テレビドラマにもなりました。津久井町にある相模原市津久井郷土資料館にはラジオドラマの脚本や映画の台本が収蔵されているとのことです。

小説「三太物語」には元気あふれる主人公三太、友達の花子、留、定、そして若く美しい女性教師花菖先生、校長、村長、三太の両親と祖父母などの姿が生き生きと描かれています。また、ウナギやアユ、アカハラ(ハヤ)、コイなど道志川や相模湖でよく見られた生き物が登場するのでとても親しみやすさと懐かしさを感じます。私自身ももう60年以上も前、道志川でこういう生き物を釣ったり捕まえたりして少年時代を過ごしたからです。また、与瀬や鎮守のスギの大木、青田の淵、小仏山などの地名もたくさん出てきて、いっそう親近感がわきます。雨ごいやカッパ退治、川で溺れる三太の話も道志川を肌で知っている私のような者にとってはほほえましく、似通った思い出がわいてきます。戦前や戦後間もないころの道志川下流の地域では、子どもたちの遊びは道志川と切っても切れないほど強いつながりがあり、そのようすがとてもよく描かれています。その話にもユーモアと明るい笑いがあふれていますが、「三太ローレライ」という話には相模湖の湖底に沈んだ勝瀬集落と、出征した兄の帰還を祈る乙女の切ない思いが描かれ、かつての勝瀬集落を知り、戦争で命を落とした親戚を持つ私にとって身につまされるものがあります。



おら三太だ ここが道志村の主
仙爺様の家だ
人玉になる術まで使い
川の見廻りに出たんだ

ただ、地元の人間だからこそ感じるこうした懐かしさとは別に、「三太物語」には今の時代の子どもたち、そして学校の教師にもこうあってほしいと思わせるものがあると強く思います。三太と仲間たちの飾らぬ素直な心、自由な発想、友達への思いやり、先生への尊敬と信頼、年寄りを敬い大切に思う気持ちなどは、どんな時代の子どもたちにも失ってほしくありません。この物語を読むと、人と人の素朴な心の結びつき、地域の風土に根差した体験の積み重ねこそ本当の教育の土台になるのだと感じます。子どもたちの心身ともにすこやかな成長のためには、知識のつめこみよりも、自然の中で思い切り体を動かし、そこから何を感じ何を学ぶかを体験することの方が大切だと思うのです。教育といえば子どもにとって窮屈で退屈なものと思われていますが、本当の教育とは子供たちと先生、そして地域の人たちが一体になった生活の中で子供たちの心と体をはぐむことだと思います。「三太物語」は明朗活発な少年を主人公にした楽しい童話というだけでなく、教育の原点を今の時代の人たちに伝える力があると思います。

道志川の下流には今もなお、「三太物語」の舞台そのままの自然が残っています。三太旅館の当主神保広さんは「青木先生」と私の両親(注・神保敏夫)・(カツ子)の交流と努力がなければ、三太の文学碑や三太旅館は残らなかったと、三人への感謝の気持ちを話します。三太の冒険心と道志川周辺の素晴らしい自然風景を愛する心は地域の人々に受け継がれているのです。

〒252-0176

神奈川県相模原市緑区寸沢嵐1755

押田 成夫